

2020年10月23日

小さなリベンジ

御沓一敏

里山アート展が17回目を迎えた。佐藤さんより送られてきた「記録集」を見ながら、よくぞここまでという感慨に浸っている。

里山アート展には1回目の構想段階からメンバーの一員として参加してきた。

やがて、会社の定年を迎えると同時に即、退職、豊実に長期滞在(冬季の3カ月間を除いて)3年間、裏方としてやってきた。

当時のコスモ夢舞台は全く整備されておらず、裏方の仕事と言っても朝から晩まで木や草刈りが主たる仕事であったように記憶している。



馴れない力仕事の原因か、右膝の半月板を断裂、歩行が困難となり、先行きが全く見えない状態に陥り、豊実を後にした。

自宅のある埼玉の病院の整形外科に通う内、そこに居る特注の靴底(足底板)を造るという理学療法士と出会った。不思議なことに、その方のお陰で間もなく普通に歩行ができるようになった。とはいえ、今までのように力仕事はできない。



そこで思いついたのが、「木の皿」をつくってみようということである。幸い大工仕事のまねごとは長くやってきた。材料はふんだんにある。ところがやってみると、いろいろな壁にぶつかり試行錯誤の連続、思うようには行かなかった。

そのころの「木の皿」を数点ふくろう会館の2階に展示させてもらっていた。そのうちの2点ばかりが今年になって、我が家へ返却「されてきた。佐藤さんの許可を得ていたとは言え、とても作品と言える代物ではない。冷や汗ものである。



恥ずかしい。そのまま、捨てたいと思ったが、これまで曲りなりにも努力してきたことを示すチャンスだと思い直し、酷い作品を生かして再生させてみようとした。

マキ子さんのつくられる美味しい蕎麦がのせられることを夢見ている。